

2005年4月24日 復活節第5主日礼拝

『主の御名があがめられますように』

(詩編115編1、使徒14章8～20)

パウロとバルナバの伝道は、不思議な展開をみせていました。行く先々でイエス・キリストの福音を語ると、そこには必ず信じる人々が起されました。その一方で、キリストを宣べ伝えると、反対や迫害も必ず起こりました。そのためパウロたちは、最後には、訪れた町から出ていかざるえませんでした。それでも神様は、パウロたちが遣われた町々に、救いに定められた人たちを、必ず用意しておられました。その人々を救いに導いたあと、パウロたちは、また次の町に行って伝道を続けます。いったん信仰に入った人々は、パウロたちが去ったあとも、キリストから離れることなく、信仰の道を歩み続けていきました。こうしたことが、何度も繰り返された後、パウロたちは、新しい町を訪れます。リストラという町です。ここに、独りの男の人が座っていました。生まれつき足に力が入らず、いままで一度も自分の足で立って歩いたことのない人でした。この人は、パウロがイエス・キリストのことを語っているのを、じっと耳を澄ませて聞いていました。この人の存在に気づいたパウロは、この男の人をじっと見つめました。すると、この人の中に、キリストを信じて救われるにふさわしい信仰があることが、パウロにはわかりました。パウロの語る福音に耳を傾けるうちに、聖霊なる神が、この人に、信じる心を与えてくださったのです。人の内に生きて働く神の業を認めたとパウロは、確信をもって語ります。自分の足でまっすぐに立ちなさい。その途端、男の人は躍り上がって、自らの足で立って歩き始めました。

よく似た光景を、前にもわたしたちは見てきました。使徒3章1～10にある、エルサレムの美しい門で起こった奇跡です。そこではペトロとヨハネが、生まれつき足の不自由な男の人を見て、こう語りかけます。「わたしには金や銀はないが、持っているものをあげよう。ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい」。そして男の右手を取って立ち上がらせると、たちまち、その男は躍り上がって立ち、歩き出して神様を賛美した、とあります。このときと同じ出来事が、今度はパウロたちの手を通して、なされたのです。このように神様は、信じる者たち、教会やそこに集う信仰者を通して、生きたみ業、救いのみ業をなさいます。ペトロやパウロ自身の力ではなく、わたしたちがこよなく信じるイエス・キリスト、その神様の力によって、人は自らの足で立って、歩き始めるのです。わたしたちもそうでした。キリストを知る前のわたしたちは、自分の足で立って歩くことができませんでした。自分では、立って歩いているつもりでも、そうではありませんでした。罪の中に埋もれ、人を愛することも、自分自身を愛することも知りませんでした。心に希望をもって、平安の中を歩むこともできませんでした。キリストを知らずにいたときのわたしたちは、「生きる」ことを失っていたのです。しかし、今は違います。イエス・キリストに救われた今は、キリストの名がわたしたちの心と足を強くしてくださ

いました。罪の中から、滅びの穴から、イエス様が手をとってわたしたちをすくい上げ、立ち上がらせてくださいました。それゆえ今は、光の中を、キリストと共に神に向かって歩むことができるようにされました。わたしたちも、ペトロやパウロ、そして教会を通して、キリストにいやされたのです。このことを神に感謝し、主の御名をほめたたえましょう。

さて使徒3章「美しい門」では、このあと、キリストの名によって足がいやされた奇跡をめぐって、ユダヤ人の間で大きな論争が起こります。ペトロとヨハネはユダヤ人から迫害され、裁判にかけられます。二度とイエス・キリストの名によって教えたり、語ってはいけないという判決を受けます。これに比べると、使徒14章の方では、ずいぶん様子が違います。

「立って歩きなさい」。パウロの声に立ち上がり、自分の足で立って、歩き出した男の人。この一部始終を見ていた町の人々は、驚いて、大声でこう叫び始めました。「神々が人間の姿をとって、わたしたちのところにお降りになった」と。そしてバルナバをゼウス、パウロをヘルメスと呼んで、彼ら二人に牛や花輪などいけにえを捧げようとさえしました。ゼウスもヘルメスも、ギリシア神話に出てくる神々のことです。とくにゼウスは、神々の長としてよく知られています。こうしてリストラの人々は、祭司から民衆にいたるまで、パウロとバルナバを生き神様と信じ込んで、二人を祀り上げ、礼拝しようとしたのです。この様子を見て、パウロとバルナバは、民衆の中に飛び込んで行き、大声で叫んで言いました。「なぜこんなことをするのですか。(やめなさい)。わたしたちも、あなたがたと同じ人間にすぎません。あなたがたが、このような偶像を離れて生ける神に立ち帰るように、わたしたちは(イエス・キリストの)福音を告げ知らせているのです」(15節)。

もし、これがわたしたちだったら、どうするでしょうか? そんなうるさいことを言わなくても、いいではないか。パウロとバルナバの伝道は、ともかくも人々の心を動かした。二人の行なった奇跡を見て、人々が群れをなして集まってきて、尊敬し、拝むとさえいうのだから、大成功ではないか。わたしたちなら、そう思ってしまいそうです。あるいは得意になって、「まあ仕方ないなあ、人の好意だから、とりあえず受けておくか。本当は神様は天にいるのだが、細かいことにはこだわらずに、難しいことはあとで教えればいい。とりあえず人はたくさん集まったのだから、何より何より。よかったよかった」。そんなふうに、受け流してしまうのではないのでしょうか? しかしパウロとバルナバは、そうはしませんでした。この事態を見過ごしにするなど、二人にできるはずもありません。神が人の姿をとってわたしたちのところ而降られた。それはイエス・キリストのほかにはいません。ところが人びとは、まことの神を見ずに、自分たち人間を神様扱いしているのです。耐えられるはずがありません。これをそのままにしておいて、何が伝道か? 何が成功か? 信仰の根本にかかわることについて、妥協することはできないのです。むしろ二人は、危機感を覚えたことでしょう。このままでは、この町の伝道は失敗に終わる。この町に健全な教会は立たない。そうした危機感は、ただ一人の神様だけを恐れ敬う信仰から出てしまし

た。そして、天地の造り主・全能の父である神様への深い愛と信頼が、二人を大きな誘惑と危険から守ったのです。

二人は、町の人々の好意を断固として拒みます。そして皆が大きな思い違いをしていることに、気づかせようとします。わたしたちが宣べ伝えている神、「この神こそ、天と地と海と、その中にあるすべてのものを造られた方です。…神は御自分のことを証ししないでおられたわけではありません。恵みをくださり、天からの雨を降らせて実りの季節を与え、食物を施して、あなたがたの心を喜びで満たしてくださっているのです」(15～17節)。「こう言って、二人は、群衆が自分たちにいけにえを献げようとするのを、やっとやめさせることができた」(18節)。

パウロとバルナバのこの姿から、思い起すことがあります。以前、私が仕えていた神奈川の教会で、たいへん信仰深い一人の老婦人がおられました。80歳を越えてなお、毎週礼拝に集っておられました。電車を乗り継いで、片道2時間近くかかる道のりを、毎週欠かさず礼拝に通ってこられました。ご夫妻ともクリスチャンで、教会の創立当時から、教会の長老として、ご夫妻ともに教会によく仕えてこられました。私が赴任したときには、ご主人はすでに天に召されておられ、ご本人もご高齢を理由に長老の職を退いておられました。しかし、いつも教会のことに気を配られ、特に婦人会員のよき相談相手としてよい働きをなさっていました。牧師の手が届かないところまで、大変行き届いた、牧会のよい手助けをしてくださいました。大変物静かな方で、柔和、謙遜が服を着ているような方でした。ところが、このご婦人が、ただ一度だけ、怒っておられるのを目にしたことがあります。それは教会の礼拝が終わり、午後の聖書研究会か婦人会が終わったあとでした。みなが雑談する中で、誰かがふと、こう漏らしたのです。「うちの教会はMさんでもっている。」(Mさんというのが、この老婦人の名前です)。この方が、今は亡きご主人と共に開拓伝道のときから牧師を助け、土地の取得や会堂建築に心血を注がれたことは、その教会の人なら知らない人はいません。いつもわたしたちのよき相談相手となり、時間を惜しまず、心を開いて話を聞いてくださったり、祈ってくださいました。ですから、そうした交わりを感謝する気持ちから、つい口に出た言葉にすぎないのです。「この方はうちの教会の重鎮で、この方がいなかったらうちの教会はなかった」。心からその方を慕い、感謝を込めて誰かが漏らした言葉。ところがその言葉を喜ぶどころか、この老婦人はきっぱりとおっしゃいました。「それは違う、違うのよ。〇〇さん、神様なの。わたしたちを救ってくださったのはイエス様。わたしたちの教会を建ててくださったのも、教会を守り支えていてくださるのも、全部それは神様なのよ!」。怒るというより、とても悲しい顔をされて、何度も何度もそうおっしゃっていました。その後も、この老婦人は、あのような声が漏れ聞こえるたびに、教会の方を、こんこんと、親身になって諭しておられました。「わたしたちがより頼んでいるのは、イエス様お一人なの。わたしたちを救うことができるのも、わたしたちを信仰に立たせてくださるのも、神様ただお一人。父・子・聖霊の神様だけを見つめてください」。そのことを、静かに、涙ながらに切々と訴えておられた姿が、今も目に焼き付いてい

ます。幸いにも、あの方の信仰は、今もあの教会で脈々と受け継がれています。

今朝の聖書を読みますと、パウロとバルナバがしたのも、本質的に同じことだったのだ、と思わされます。

パウロたちを拜もうとしたのは、異邦人です。まことの神をまだ知らなかった人びと、まだキリスト教の信仰をしっかりと持つ前の人びとです。でも、神を、キリストを、聖霊だけを仰いでいるはずの(つもりの)わたしたちクリスチャンも、ときどき同じ間違いをします。目に見えるところだけを見て、人を崇めたり、人につまづいたりして、まことの信仰からそれてしまう。そういう誘惑、危険が、教会の外だけでなく、教会の中にも今もあるのです。そのようなときこそ、今朝の聖書の言葉、パウロが語ったみ言葉を思い出したいと思います。わたしたちを造り、命を与えてくださったのは、この神様お一人であること。この神様の偉大なみ業と主の慈しみとまことを、いつも心に刻みましょう。わたしたちの身代わりに十字架につき、復活の命を与えてくださった救い主は、ただキリストお一人であることを、心から信じて告白しましょう。そして聖霊こそが、わたしたちの内に住まい、われわれを聖なる神の宮へと造り変えてくださることに感謝をささげましょう。父・子・聖霊の一人の神様だけをいつも見上げて、ただ一つの恵みに生かされていきたいと思えます。そのとき、わたしたちは、自らの足でしっかりと立ち、自らの唇で、主の大いなる御名を心からほめたたえる者となるのです。

願わくは、「わたしたちではなく、主よ、わたしたちではなく あなたの御名こそ、栄え輝きますように あなたのいつくしみとまことによって」(詩編 115 編 1)。このみ言葉が、わたしたちの内でも実現しますように、祈りましょう。 [説教者：堀地正弘牧師]